

・やりたいこと

ひところ「やりたいことをやりなさい」とよくいわれました。あれはウソです。ウソはいいすぎにしても、本当にやりたいことをやれる人間なんてめったにいません。

そもそも、やりたいことがわからない。やりたいことがわからないのに、「やりたいことをやりなさい」といわれるものだから、やりたいことを探さなければなりません。やりたいことではないことをしていると、なんだか悪いことをしているような、時間をむだにしているような気がしてきます。やりたいと思って始めたことも、やっているうちに、「これが本当にやりたいことだったのだろうか」と疑念が生じてくる。そこで、いまやっていることを辞めて、本当にやりたいことを探し始めます。しかし、やりたいことなんて、探して見つかるものでしょうか。

これとよく似ているのが、「本当の自分探し」です。いまの自分は本当の自分ではないと思って、本当の自分を探そうとするわけです。しかし、探して見つかる本当の自分って何なのでしょう。なんだか、いんちきくさい。自分に「本当」とか「ニセモノ」とかあるのでしょうか。多重人格じゃあるまいし。

・調べればおもしろくなる

ものごとはたいてい、調べれば調べるほどおもしろくなります。

「やりたいこと」でなくても、おもしろいことはたくさんあります。

・出版社に営業に出かける

営業で編集者が見るのは“ひとがら”です。“感じ、”といってもいい。「この人は信用できるな」と思うかどうか。これは文章のうまい・下手とは関係ありません。おもしろいネタを拾ってくるかどうか、おもしろいものを見方をするかどうか、取材先などといい関係をつくれるかどうか、そして何より編集者といういい関係をつくれるかどうか。ミもフタもないいい方をする、「一緒に仕事をしたい」と思うかどうか。

・著者の例

先にも書いたように、ライターとして仕事を始めたころ、私は書店員でした。いろんな編集者が来る書店で、よく客と書店員という関係でおしゃべりしていました。そんなおしゃべりのなかから「永江くん、今みたいな話、ちょっとウチの雑誌に書いてくれる？」みたいなノリで原稿依頼になっていきました。勤めていた書店が、「店の宣伝になるから、アルバイトとしてのライター活動大歓迎」というところだったことも幸いしています。

やがて私は労働組合の仕事をするようになり、ほかの書店や出版社の組合関係者、業界紙関係者とも頻繁に会うようになりました。会議の後、居酒屋で飲んでいるときによもやま話となり、ライターとしてもちょっと仕事をしていることや、いま興味のあることなどに話が及び、「こんどウチの雑誌にも書かない？」なんていうふうになりました。

私が得意とするジャンルのひとつは出版産業です。これも幸いしました。出版社を取材に行くと、後日、その出版社から「ウチで仕事を」となることもありました。本の著者インタビューもたくさんやりましたが、インタビューに同席した著者（インタビュイー）の担当編集者から、仕事をいただくこともありました。つまり無意識のうちに、日々の仕事ライターとしての営業活動になっていたわけです。

・このテーマならあいつに

フリーライターは出版業界の便利屋みたいなものです。何度もいうように、「やりたいこと」より「できること」が仕事選びのポイントです。とはいえ、「何でもやります」というだけで生き残っていくのは難しいでしょう。やはり「このテーマならあいつに」と編集者に思ってもらえる、期待してもらえるライターにならなければ、長くはやっていけません。

・いままでにないもの

「いままでにない斬新な企画を」と編集者は求めます。しかし「いままでにない」もの、「斬新」なものを、そう簡単に思いつくわけがありません。簡単に思いつくなら斬新でもなんでもないはずです。ではどうするか。私がやるのは「ひっくり返し」です。世の中の常識に対して正反対のことを考える。

・自費出版の本

自費出版の本などにある紀行文や自伝（自分史などと呼ばれることが多い）。読者のためではなく自分のために書いた本です。自分がおもしろかったことを「おもしろかった」と書き、自分がつらかったことを「つらかった」と書いてあるだけ。そこには「読者にとってどうなのか」という意識がありません。

・ルポルタージュ

ルポルタージュの書き手は幸福になってはいけません。少なくとも読者よりは。私たちは**他人の不幸が大好き**です。

不幸になる覚悟があれば、わざわざ辺境や危険地帯まで足を運ばなくてもルポルタージュを書くことができます。たとえば買い物エッセイ。中村うさぎや、IT系ガジェットではスタバ斎藤らが書いている分野ですが、彼らのエッセイがおもしろいのは、「いいもの」を買って成功したときではなく、つまらないものをつかまされて悔しい思いをしたときです。「こんなバカな買い物をして」と書き手が悔しがれば悔しかるほど、読者は楽しくなります。そして、買い物（失敗）ルポルタージュは「私はこんなバカな買い物をしないようにしよう」と読者にとって反面教師の役割を果たすわけです。

・フリーライターは天職

私は人づきあいが苦手です。酒は好きですが、誰かと飲みに行くことはほとんどありません。夕食や酒席の誘いはほとんど断っています。パーティのたぐいも嫌い。人がたくさん集まっているところには近づきたくない。他人と酒を飲むよりも、自宅で本を読んでいるほうが楽しい。そんな私にとってフリーライターは天職のようなものです。満員電車に乗らなくていいし、ひとりで仕事ができる。家族以外の誰とも口を利かない日がけっこうあります。それで何の不自由もありません。

それでも仕事をしていくからには、最小限の人づきあいが必要です。編集者とは打ち合わせや原稿のやりとりをしなければならないし、取材相手には質問を投げかけて言葉を引き出さなければなりません。

フリーライターにとってもっとも大切なのが編集者とのつきあいです。編集者を信頼しなければなりません。

それはなにも編集者が仕事をくれるからではありません。編集者は企画と一緒に考え、実現化に向けてともに働くパートナーであり、原稿を読む最初の読者であり、その原稿についてアドバイスしてくれる助言者です。編集者なしの本も考えられなくはないけれども、クオリティはあまり期待できないでしょう。

・ムツとしてしまう

編集者に疑問点を指摘されたとき、瞬間的にムツとしてしまうのはしかたのないことです。自分を守ろうとする本能みたいなものだと思います。重要なのはそれから。冷静になって、客観的になって、「なぜ編集者は疑問に思ったのだろう」と考えます。よく考えて自分が書いた文章を読み直せば、疑問に思った理由もわかります

・ケータイ小説

じつはケータイ小説がヒットした背景には、既存メディア産業の四大卒世界観からこぼれていた人びとの存在が大きかったと私は解釈しています。ふだんは本なんか読まない、読まないどころか本に反発さえ感じているような少女たちがケータイ小説の読者でした。「本に反発」というのは大げさでも言葉のあやでもなく、実際にいるのです。正確にいう

と「本を読んでいるようなヤツらは嫌い」という人びとが。

・原稿料

原稿料に相場というものはありませんが、だいたい一枚四〇〇〇円から五〇〇〇円ぐらいがひとつの目安でしょう。当然のことながら、儲かっている雑誌は原稿料が高く、台所事情の苦しい雑誌は原稿料が安い。どの雑誌が儲かっている、どの雑誌が青息吐息かは、外見だけではなかなかわかりません。派手でおしゃれな雑誌だからといって儲かっているとは限らないし、地味な雑誌が意外と儲かっていたり。

・報酬の分配

ゴーストライターの場合もまちまちです。表向きの著者が八%でゴーストライターが二%という場合もあれば、五%ずつということもあります。私が経験したなかでは、表向きの著者とゴーストライターである私が六%ずつ受け取ったケースがあります。また、ゴーストライターのギャラも印税契約ではなく原稿料契約（買い取り）の場合があります。

このように書籍を出版するといっても、その報酬の計算方法はいろいろあります。さらに「締め」を発行日の何日後にして、支払いを何日後にするかなど、さまざまな要素があります。

ライターはこういう数字のこととなると、つい鷹揚になりがちです。「適当でいいですよ」なんて、私もよくいいます。面倒くさいのが三分の一、よくわかっていないのが三分の一、本が出るので舞い上がっているのが三分の一です。

でも、あとあと後悔しないためにも、数字のこと、**お金のことはきっちり確認し、冷静に判断しましょう**。基本的に人はできるだけ「払いたくない」と思い、できるだけ「受け取りたい」と考えるものです。出版社も「支払いはできるだけ少なく、できるだけ遅く」と考えているはずで

す。お金にきっちりしていることはなんら恥ずべきことではありません。原稿料や印税はあなたが書いた原稿の当然の対価です。私は原稿料はお布施であると考えていますが、お布施にも相場というものがありますし、たくさんいただければそれにこしたことはありません。

・客員教授

二〇〇八年の春から早稲田大学で教授をしています。こちらは最初から三年の期間限定と決まっています。最初の一年は「客員教授」という肩書きで、二年目から「教授（任期付き）」となりましたが、実態は何も変わりません。講義は週に四つあり、週二日、大学に勤務しています。これも兼業のようなものですね。

・著者のジャンル

私は自分のジャンルを三つに分けて考えていました。ひとつは出版産業、とりわけ**出版流通**を中心としたこと。たとえば取次のトーハンが書店経営者向けに発行している『書店経営』という雑誌でいまも書店ルポを連載しています。『新文化』や『文化通信』など出版業界の業界紙での仕事もこれに含まれます。

二つめは**エロ**、ポルノグラフィの仕事です。これは西武に勤めているときからやりました。洋書店の常連客にアダルト誌の編集者がいて、最初は新着洋書の紹介記事などの仕事をもらいました。西武を退社してフリーランスとなったときも、編集部にデスクを用意してくれて編集補助の仕事をくれました。

社内にデスクがあるので、他の雑誌の編集部からも仕事をもらえるようになりました。AV女優のインタビューや撮影現場ルポ、アダルトビデオ評などいろんなことをやります。引退してストリッパーになった元AV女優を劇場の楽屋に訪問したこともありますし、SMマニアの人の話を聞きに行ったこともあります。亡くなったAV女優の林由美香さんには何度もインタビューしました。何十本ものアダルトビデオを見て感想コメントを書く月もありました。投稿写真の手紙を書いたこともあります。編集者が撮ってきた写真を渡され、それにいかにも素人っぽい文章をつけるのです。

三つめが『宝島』や『自由時間』など一般誌の仕事です。『自由時間』では店の取材から、学者へのインタビューまでさまざまなことをやりましたが、他の一般誌ではインタビ

ューの仕事と書評が中心になっていきました。これも私が計画的にそうしたというよりも、自然とインタビューと書評が増えていったという感じです。

新世紀に入ると、ポルノ関係の仕事が激減します。インターネットの影響などでポルノ誌の市場が急速に収縮したためです。私が連載していた雑誌も次々と休刊していきました。『S&M スナイパー』が休刊したときは、さすがにショックでした。

以前なかった仕事でいま増えているのは講演やラジオの出演です。講演は得意ではないし、決して好きではないのですが（緊張を強いられるのが苦手です）、出版界にとってプラスになること、読書推進の役に立つことだったら、ノーギャラであっても声をかけていただいたら断らないことにしています。もっとも、講演やラジオの出演はライターとしての本業ではありません。

・電子本

二〇〇九年の夏、私は簡単な実験をしてみました。iPod Touch で森鷗外を読んでもみる、という実験です。鷗外の史伝、『渋江抽斎』を選びました。青空文庫で無料公開されている『渋江抽斎』をダウンロードして iPod で読みました。違和感があったのは最初だけです。

電車の中で読んでいたのですが、三日もすれば慣れてしまいます。比較のために岩波文庫版の『渋江抽斎』も読みました。朝の満員電車のなかでは、むしろ iPod のほうが快適に読めたぐらいです。厚くて重い本なら電子本のほうがいいかもしれません。

・好奇心代行業

いま「好奇心代行業」の可能性はどこにあるか？ そういう目で世間を見渡せば、きっと新しい市場が開拓できると思います。